

啓蒙期の翻訳文学 —— 中村正直と奥野昌綱 ——

山 本 良

I

先頃筆者は、ヘボン訳聖書の一つ『新約聖書約翰伝』^{ヨハネ}（一八七二）と、その翻訳刊行に関与したある一歌人について論ずる機会を得た（注1）。そこで取り上げたのは、ヨハネ福音書の第一章一節「*Ἐν ἀρχῇ ἦν ὁ λόγος* / *In the beginning was the Word* / 初めに言があつた」における「*λόγος* ロゴス」の思想的な、そしてまた文学的な問題である。「ロゴス」概念の重要性は、西洋形而上学を指すデリダの用語「ロゴス中心主義 *logocentrisme*」に端的に現われているように、説明するまでもない。

当該論文では、ヘボン『新約聖書約翰伝』^{ヨハネ}の同節が「元始に^{こゝろたま}言霊あり」とされている事実について、それが奥野昌綱の創案になること等を丹念に論証した。しかしながら、奥野の特異性を示す結論部においては、比較の対象である敬宇中村正直との

差異、奥野と敬宇との個人的な関係性等々、紙幅の都合上、多くを省略せざるを得なかつた。いわば、学界の共通理解に寄るかかると同時に、奥野と敬宇の関係や、敬宇の翻訳漢詩について考察していくこととする。前稿との重複を避けるよう努めるが、行論の都合上、内容に一部重なる箇所がある。

（二）でヨハネ福音書における「ロゴス」とは何か、簡略に確認しておく。

初めに言があつた。^{ことば}言は神と共にあつた。言は神であつた。（新共同訳）

元始に言霊あり ^{はじめ}言霊は神とともにあり 言霊は神なり
（ヘボン訳）

一節は、しばしば「先住のロゴス」と呼ばれる。創世記と近似しつつも、神による創造に先だつて存在する「ロゴス」は、「ことば」であると同時に神であり、かつ「神と共に」あるという

意味では、異なる存在である。これが三位一体の思想につながる。続いて、人間に与えられた「命」と「光」について、それを証しする洗礼者ヨハネ、世界に到来した真実の「光」（であるイエス）、そして、一四節で「イエスの受肉」が語られる。

ヨハネ福音書は、共観福音書—マタイ、マルコ、ルカ福音書を、共通する記述が多いことからこのように呼ぶ—と比較しても、神学的であると同時に歴史的な書とも言われる。一四節以降、「歴史的事実」としてのイエスの事蹟を中心に語ることからそのように言われるのだが、少なくとも冒頭第一章が、高度に思弁的であることは争われない。

「ロゴス」は一章一四節以降は表れない。三節から一三節までは代名詞で受けているので、その代名詞が何を指しているのが神学的にはつねに問題になる。ヨハネ福音書の背景にヘルニズムがあると見なす場合、宇宙生成の根源的な原理としたストア派由来のそれが指摘される。あるいは、ギリシヤ哲学の諸概念で旧約聖書を再解釈したユダヤ人哲学者アレクサンドリアのフィロンによる神のことばとしての「ロゴス」思想を、直接の淵源とする解釈もあるが、批判も多い。福音書成立後の二世紀頃、ユステイノスに代表されるような、ギリシヤ哲学を背景にしてギリシヤ語で著述した初期教父が、プラトンの教説に根差し、フィロンとは異なる新約的な視点を提示しつつ、イエスこそがロゴスであるとする「ロゴス・キリスト論」を唱えて以来、この問題に複雑な思弁を与えてきた。

ここには、人々が、信仰へ踏み出す際に、障壁となるべき思弁が幾重にも折り重なっている。その最大のものが、「ロゴス」

の受肉としてのイエス、であろう。本稿の射程でいえば、奥野はこの障壁をわずかな期間に飛び越えて見せ、中村正直は時間をかけつつ、最終的にその壁の前で佇んでいたように見える。本稿は、その違いを、「文学」形式の差異から考えようとしている。

「あえて付言するが、日本の言霊研究書の中には、ヨハネ福音書と言霊思想の一見した類似を、自明のものと見なすものがある。しかしながら、「ロゴス＝言霊」という類推が、あたかも人類の普遍的無意識からやってくる自然な発想であるのか、ごとき認識は、厳に戒められるべきである。仮にこれが自然な類推に見えたとすれば、それは我々が近代的なまなざしから眺めているからである（注2）。

ところで、ヘボン訳ヨハネ福音書には、もう一種類の本文がある。アメリカン・ボード宣教師D・C・グリーンンの日本語教師であった市川栄之助が作成した写本であって、そこでは、「元始に道はじめハあり 道ハ神とともと偕ともにあり 道ハ神なり この道ハ元始に神と偕ともにあり」となっており、「ロゴス」は「道」とされていたのである。この「ロゴス」＝「道」という理解は、ブリッジマン＝カルバートソン訳漢訳聖書の本文「元始有道道偕とも神道即神是道元始偕神也（元始に道はあり。道は神と偕ともにあり。道は即ち神なり。この道は元始に神と偕ともにあり。）」に拠っていることは明かである。それに先立つモリソン訳の漢訳聖書では、「当始はじめ已有言（当始はじめに言あり）」と、「ロゴス＝言」であった。漢訳聖書における「ロゴス」＝「道」という理解が、朱子学を媒介としていることは、ブリッジマンが創刊した「Chinese

Repository」に掲載されている種々の論文によって明らかになる(注3)。だからこそ、昌平覺で学んだ奥野にとつて理解は容易で、「ロゴス」＝「道」とする漢訳聖書本文をそのまま訓読して済ませられたはずなのである。この数年後の聖書翻訳委員会訳でも「ロゴス」＝「言」¹¹とされているのだから、やはり七二年版の「言霊」という訳語だけが、際立つて異様に聞こえるのである。

II

筆者は、前稿でヨハネ福音書冒頭の「Logos ロゴス」を「言霊」としたのは奥野の創案である、という仮説を提起した。この論証そのものは前稿を参照されたいが、論証の最も肝要な点は、その「言霊」という表現が、一九世紀の国学が強調する、ある意味では狂信的な、日本主義的言語観に基づくのではなく、むしろ和歌的なものであることを示すことであり、それを可能とした契機が、奥野の和歌の師である海野遊翁を経由して体现した近世期の歌論にあること、であった。具体的には、小沢蘆庵の「ただごと歌」、蘆庵に私淑した香川景樹の「調べ」の説に由来する、近代短歌の写生説にも近似した方法論である。

黒田惟信『奥野昌綱先生略伝並歌集』(注4)(以下、『略伝』)によれば、奥野昌綱は一八二三(文政六)年四月徒士竹内五郎左衛門直道の三男として生まれ、一八三三(天保四)年東叡山寛永寺春性院の隨身となり、武道や遊芸に励む。一八三八(天保九)年には、昌平覺で経学を学び、二年で弁書講義の試験に

合格、一八四八(弘化四)年、迎えられて奥野家を嗣ぐ。和漢学、仏学をも学ぶ中で、奥野が最も得意としたのが和歌であった。竹内家の隣人であり、昌綱のいとこおばを妻とした歌人海野遊翁(幸典)の薫陶を受け、寛永寺出仕時も、その才を存分に發揮した。

奥野によれば、遊翁は「紀貫之を非常に尊んだ物で食後は必ず貫之集を拝吟する事が一二時間である」とのこと、実際に遊翁の「柳園歌集」には、「調べ」を唱えた景樹に倣い、古今集を重視したいかにも桂園派らしい歌が並んでいる。

梅花盛

行きかへりかへりみれども梅の花たゞ白雪のかをるなり
けり

白梅を白雪に見立てる伝統に則りながら、「行きかへりかへりみれども」と言葉を重ねて景樹歌に特徴的な「動画のような動き」を見せ(注5)、盛りの梅を「白雪のかをる」と詠む清新な表現によって、「調べ」を整えた歌といえる。その一方、

ものへまかりける道にて梅のちりしけるをみて

梅の花ちれる垣ねを長閑なる日かげに消えぬ雪とみしかな垣根に散る梅の素朴な小景を、先の歌と同趣の伝統的表現で詠みながら、強く実景として感じさせる点で、「ただごと歌」の性格を明かに示す。遊翁から引き継がれた、このような「ただごと歌」の方法論が、受洗後の奥野において、自己の信仰を実景に重ねながら告白するという、いわば「信仰告白(Confession、クレド)」を超えて「告白(confession)」でありうるような、長歌を可能にしたのである。

奥野の長歌における可能性の論証は前稿を参照されたく、ここでは引用も行わない。本稿が考察を試みたいのは、奥野の盟友中村正直の漢詩である。

III

敬宇中村正直は、奥野の九歳年少で、一八三二(天保三)年生まれ、一七歳の時に昌平坂学問所寄宿寮に入る。奥野と昌平の修学時期は重なっていない。一八六六(慶応二年)、留学生取締役の「儒者」として、イギリス留学、留学中は「文学の習得に専念した」(注6)。幕府瓦解により、わずか一年半にして、一八六八(慶応四)年六月帰国。失意の中、徳川家達に従って駿府へ移住、静岡学問所の教授となる。同僚のE・W・クラークを知り、その聖書研究会に参加、一八七四(明治七)年に受洗している。また、その間、『西国立志編』(一八七〇年)『自由之理』(一八七二年)を翻訳出版している。しかし、明治十年代の半ばごろからは、「正統的キリスト教から離れて」いく(注7)。晩年は、ユニテリアンに接近し、儒学にも回帰し、R・E・エマーソンに最も深く傾倒した。

敬宇と奥野には実際の交友がある。『略伝』は、両者が面識を持つに至った経緯を詳細に記していない。ただし、いくつかの状況証拠は挙げるができる。一つには、敬宇が渡英した際の留学生の中に林桃三郎(董三郎)がいたことである、林は、後の外交官林董^{たす}で、ヘボン塾の学生、ヘボンとヘボン夫人クララに最も愛された一人でもあった。

おそらく直接的な交わりが生じたのは、静岡学問所の教授として招聘されたクラーク(Edward Warren Clark)を敬宇が横浜に迎えた一八七一(明治四)年一月直後であろう。その年は、奥野がヘボンの日本語教師になった年であり、一月にヘボンが上海に渡ったため、奥野はブラウンの助手となっている。翌年、ブラウン邸の隣、改革派宣教師J・H・バラの自邸に、米国婦人一致伝道教会から派遣されたメアリー・P・ピアソンらによってアメリカン・ミッション・ホームが開設されると、敬宇は親族を託している(注8)。奥野は同年七月にブラウンより洗礼を受けているが、敬宇は六月に大蔵省翻訳局長に任じられ、東京へ移転している。その後、伝道に従事することになった奥野は、共立女学校(前出アメリカン・ミッション・ホームの後身)でも説教を行っている。『略伝』によれば、一八七七(明治一〇)年に奥野が東京麹町教会牧師となつて後、自宅で説教会を行っている、敬宇が勝手口より静かに入り、説教が終了すると人知れず立ち去ったりなどという仲であったという。「漢訳聖書の訓点以来、博士と親しく交際往來して」(一一〇頁)いたからである。実際、奥野が訓点を施した『格物探源』に敬宇は序を寄せている(注9)。

『略伝』には、また、敬宇の臨終にまつわる次のような記述がある。

明治二十四年六月、博士(注・敬宇)の病に侵さるゝや、先生(注・奥野)之を病床に訪ひ、信仰の言を以て之を慰問した。其時博士は先生に向ひ、つくづく其所懐を披瀝して、「奥野さん。貴下^{あなた}は善い務を得た者である。余のごと

きは四文八文の帳面付けに異らない」と曰つたさうである。実に「鳥の將に死なんとするや、其声や哀しく、人の將に死なんとするや、其言や善」いのである。絶世の碩儒敬宇博士の此一言は、世人の宜しく傾聴すべき所であらう。其六日病の漸く革らんとする由を聞いて、先生は直に之に赴き、博士の耳に口つけ、神に祈つて別を告げたところ、博士は堅く先生の手を握つて、暫時之を放さなかつたさうである。斯くて翌七日に至り、博士は遂に溘然として世を去つたといふことである。(一一一頁)

二人の誠実な交わりを暗示して、感動的な逸話でもあるが、見方を変えれば、両者の差異を表わしてもいる。つまり、奥野が晩年のすべてを伝道に注ぎ信仰に生きて終つたのに対し、敬宇が、受洗後も教義への疑念を拭えず、信仰とは不即不離の関係を築き、儒学者的立場を生涯捨て去ることのなかつたこと、その帰結を如実に示しているのではないか。

敬宇のキリスト教理解については、早くから儒教を媒介にした不徹底なものであることが指摘されている(注10)。敬宇のキリスト教理解における欠落が、後年のユニテリアンへの接近を促したことにしても同様である。

以上確認してきたように、世代の違いや洋学の知識の有無などは無視できないものの、昌平饗で学んだ奥野と敬宇とは、キリスト教への接近において、またその朱子学的解釈(注11)、自然神学的理解において、大きく重なっている。しかしながら、その後のあまりにも隔たった信仰のあり様や文業を、いったいどのように理解したらよいのか。

ここでは、敬宇の翻訳漢詩を中心に、敬宇の《詩》と信仰について検討していきたい。

敬宇の《詩》を正面から論じた論文に、揖斐高氏「詩人としての中村敬宇」(注12)と野山嘉正氏「中村敬宇―宗教と文学―」(注13)とがある。

野山氏は、留学出発時の詩、静岡時代に書かれた詩、ロングフェローの訳詩を中心に分析し、とりわけ静岡で失意の内にあつた敬宇の鬱屈を「自己了解の原点」と見定め、「それが敬宇の『詩』に他ならない」とする。一方で、後半生には「伝統の儒学と西洋のキリスト教倫理との幸運な合体が果たされた」「幸福な統一感に包まれていた」中で、「平易な散文を展開して」いるものの、「表現者として立つた詩人とはいえない」という評価を下している。

野山氏の論考は、「実際に表現としての詩を推進していったのは和文系の蘇生を意図する讚美歌の翻訳者及び創作者であつた。」という謎めいた一文で締めくくられている。ここで想定されているのは初期の讚美歌に関わつた複数の固有名であろうし、実際に奥野が「和文系の蘇生を意図」していたかどうか、即断できないが、野山氏の脳裏に奥野の名前があつたとはい充分に考えられる。前稿ならびに本稿の課題の一つは、この残された疑問にいくらかでも応えることであつた。

敬字の翻訳漢詩三編は、敬字没後に刊行された自撰漢詩集『敬字詩集』^{注14}「巻二 嶽南集」に収められている。「嶽南集」は、前述の静岡移住時代―嶽南とは富嶽の南―の詩で構成されている。この三編の題は、それぞれ次の通りである。(便宜上番号を付す。)

- ① 「普魯斯詩 訳英人詩意」
- ② 「僻村牧師歌 訳英人ゴールドスミス詩意」
- ③ 「打鉄匠歌 ロングフェルロー詩」

このうち②③については、前述の揖斐高氏による翻刻・注釈があつて、原詩の作者名・作品名・出典文献は、ある程度判明している。また、野山喜正氏が前掲論文で③の原詩全文を引用し、考察を行っている。ただし、両者とも③がどの文献によつてゐるかは、明らかにされていない。要するに、②と③は、敬字が明示した作者名と訳詩の内容から、原詩は明らかにされているのだが、敬字が拠つた文献資料については、不明な点も多いのである(注15)。

①については、揖斐氏の注釈もなく、いまだ原詩も判明していないが、本稿では、新たな調査結果も示しつつ、考察を行いたいと思う。

管見の限りで、①についての論考は、久保忠夫氏による「中村正直訳「普魯斯歌の原詩」「中村正直訳「普魯斯歌」の原詩(続)」の二論文のみである(注16)。久保氏はまず第一の論文で、

高橋昌郎『中村敬字』が、この詩を「普魯ス^{プロシヤ}の詩」と読んできたことを修正された。実際、この基本文献が「プロシヤ」と誤読したことは、その後の研究に少なからぬ影響があつたと思われる。この詩がスコットランド王が蜘蛛を見て再起を期す逸話を基にしていることは、内容上明らかであつた。久保氏は、「普魯ス」が「プロシヤ」ではなく、「ブルース」、すなわちスコットランド王ロバート一世、ロバート・ブルース(Robert the Bruce)であることを突き止められた。さらに一三七〇年代の叙事詩 John Barbour, *The Brus* (*The Bruce*) の近代英語訳 George Eye Todd, *The Bruce*, 1907 を検討の上、そこにはこの逸話が収められておらず、「正直が拠つたテキストは未詳としておく。」とされた。第二論文では、松村昌家氏の助力を得て、この逸話が古伝説などではなく、ウォルター・スコットによるスコットランドの歴史物語 *Tales of a Grandfather*. *Being stories taken from Scott's History*, 1828 が初出であるらしきことを突き止められた。しかし、敬字の詩が「訳英人詩意」とあるのに、これが詩ではないことから、最終的に「中村正直の漢詩がこれを下敷きにして出来たといひ切るのは躊躇される」、「ブルースと蜘蛛伝説をうたつた詩が出て来るまで、スコットの文章を挙げておきたい」と結論づけられた。なお久保氏は言及していないが、今回の調査で、スコットの同書が成蹊大学図書館中村正直文庫に含まれていることは確認できた。

また、久保氏の論文の後に発表された揖斐氏の前掲論文では、「この詩はスコットランドのブルースという王を詠んだ詩の漢詩訳で」、他の二編とは違い「キリスト教信仰とは関係がない」

とされ、そのためか、それ以上の言及と翻刻・注釈はなされな
かした。

今回の調査により、敬字の拠った原詩は Eliza Cook, *Try
Again* ではないかと、この仮説を得た。以下、全文を引用すべ

KING BRUCE of Scotland hung himself down / In a lonely
mood to think ;

"Tis true he was monarch, and wore a crown, / But his
heart was beginning to sink.

For he had been trying to do a great deed / To make his
people glad,

He had tried and tried, but couldn't succeed, / And so he
became quite sad.

He flung himself down in low despair, / As grieved as man
could be ;

And after a while as he pondered there, / "I'll give it all
up," said he.

Now just at the moment a spider dropped, / With its silken
cobweb clue,

And the king in the midst of his thinking stopped / To see
what the spider would do.

"Twas a long way up to the ceiling dome, / And it hung by a

rope so fine,
That how it would get to its cobweb home, / King Bruce
could not divine.

It soon began to cling and crawl / Straight up with strong
endeavour,

But down it came, with a slipping sprawl, / As near to the
ground as ever.

Up, up it ran, not a second it stayed, / To utter the least
complaint,

Till it fell still lower, and there it laid, / A little dizzy and
faint.

Its head grew steady—again it went, / And travelled a half
yard higher,

"Twas a delicate thread it had to tread, / And a road where
its feet would tire.

Again it fell and swung below, / But again it quickly
mounted,

Till up and down, now fast, now slow, / Nine brave
attempts were counted.

"Sure," cried the king, "that foolish thing / Will strive no

more to climb,
When it toils so hard to reach and cling, / And tumbles
every time."

But up the insect went once more, / Ah me, 'tis an anxious
minute,
He's only a foot from his cobweb door, / Oh, say will he lose
or win it!

Steadily, steadily, inch by inch, / Higher and higher he got,
And a bold little run at the very last pinch, / Put him into
his native spot.

"Bravo, bravo!" the king cried out, / "All honour to those
who try,

The spider up there defied despair, / He conquered, and
why shouldn't I?"

And Bruce of Scotland braced his mind, / And gossips tell
the tale,

That he tried once more as he tried before, / And that time
he did not fail.

Pay goodly heed, all you who read, / And beware of
saying, "I can't,"

'Tis a cowardly word, and apt to lead / To Idleness, Folly
and Want.

Whenever you find your heart despair / Of doing some
goodly thing.

Con over this strain, try bravely again, / And remember
the Spider and King.

最後の二種は、読者に向かう。この逸話から引き出される
教訓を語りつ終むる。また、この詩を収録するアンソロジーに
は、次のような前文が添えられている。#51。

"KING ROBERT BRUCE, being out on an expedition
to reconnoitre the enemy, had occasion to sleep at
night in a barn. In the morning, still reclining his
head on a pillow of straw, he beheld a spider climbing
up a beam of the roof. The insect fell to the ground,
but immediately made a second essay to ascend. This
attracted the notice of the hero, who, with regret, saw
the spider fall a second time from the same eminence.

It made a third unsuccessful attempt. Not without a
mixture of concern and curiosity, the monarch twelve
times beheld the insect baffled in its aim; but the
thirteenth essay was crowned with success. It gained
the summit of the barn, and the king, starting from
his couch, exclaimed, "This despicable insect has taught
me perseverance! I will follow its example. Have I not

been twelve times defeated by the enemy's superior force? On one fight more hangs the independence of my country! In a few days his anticipations were fully realized, by the glorious result, to Scotland, of the Battle of Bannockburn. — Goodrich's Fireside Education.

1) の前文は Samuel Griswold Goodrich, *Goodrich's Fireside Education* (1838 頃か) から採られているが、サミュエル・グリスウォルド・グッドドリッチは筆名ピーター・パーレー (Peter Parley) の方が、『万国史』(1837) の著者として明治日本ではよく知られていた。この前文は解説文としても機能している。仮にロバート一世に関する知識がなくとも、理解の一助になったと思われる。

「普魯斯詩」の全文は、次の通りである。

普魯斯詩 訳英人詩意

蘇国昔有王。名曰普魯斯。屢與隣国戦。頻興三軍師。王頗矜血氣。先士卒指麾。独奈時運否。屢敗軍大虧。一日步虚廊。太息復沈思。既曰可以已。戰不可復為。察其言外意。勢力既凋衰。縱我尽人力。奈敵得天時。偶有墜前者。小蟲抱細糸。認知是蜘蛛。自空梁而墮。地板至屋頂。其室是遠而。可得再上否。王不能推知。小蟲忽軋動。爬上蹕蹕遲。其繩甚幼細。手足緊繫持。形小膽則大。将高而忽卑。或中途失脚。地下仍委蛇。或既近網戸。如不甚相離。一落俄千丈。前功致難追。每試而每敗。鼓勇力不羸。王算至九跌。見渠体似痿。渠欲已也夫。王代為嘆噫。豈知氣稍蘇。一回又登危。王目不暇瞬。觀之忍噫呻。一寸又一寸。漸上近眾兇。料其力可達。一躍

得其棲。王感嘆而叫。曰大奇大奇。偉勲与栄明。堅忍者得之。渠既打羸過。我豈不及伊。王由是發憤。調兵堅旌旗。此回始勝敵。大得廓邊陲。所以志心堅。成事実有茲。一蹶輒沮者。曷不誦此詩。

(蘇国 昔 王有り / 名を普魯斯と曰ふ / 屢隣国と戦ひ / 頻りに三軍師を興す / 王 頗る血氣を矜り / 士卒の指麾を先んずる / 独り時運に否ざるのみをいかん / 屢軍さに敗れ大いに虧く / 一日虚廊を歩み / 太息し復た沈思す / 既にして曰ふ / 以て已む可し / 戦さ復すべからざるやと / その言外の意を察するに / 勢力既に凋衰す / 縱ひ我人力を尽くすとも / 敵の天時を得るをいかん / 偶前に墜る者有り / 小蟲細糸を抱く / 是れ蜘蛛ならんと認知す / 自ら空に梁して墮つ / 地板より屋頂に至る / その室は是れ遠く / 再び上り得べけんや否や / 王 推知する能わず / 小蟲忽ち軋動 / 爬ひ上ること蹕蹕として遲し / その繩甚だ幼細 / 手足緊繫として持つ / 形小にして膽則ち大 / 将に高からんとして忽卑 / 或ひは中途にして失脚 / 地の下にて仍に委蛇たり / 或ひは既に網戸に近り / 相ひ離れざるが如し / 一落俄かに千丈 / 前功追ひ難しと致す / 毎に試みて毎に敗れども / 勇力を鼓して羸らず / 王 算ふること九跌に至る / 渠の体痿へるに似るを見る / 渠 已むことを欲するか / 王 嘆噫を為すに代ふ / 豈に氣の稍蘇へるを知らんや / 一回又た登るも危し / 王の目 暇も瞬かず / 之を觀て噫呻するを忍ぶ / 一寸又た一寸 / 漸く眾兇近く上り / 其の力の達すべきを料る / 一躍其の棲を得 / 王 感嘆して叫ぶ / 曰く 大奇大奇 / 偉勲と栄明と / 堅忍は之を得 / 渠 既に打ち

贏ちて過る／我豈に伊に及ばざらんや／王是に由て發憤／兵を調へ旌旗を堅くす／此の回始めて敵に勝つ／大いに辺陲を廓るを得／志は応に堅くすべき所以／事実は茲に有りと成す／「蹶轍ち沮む者／曷ぞ此の詩を誦まざる

とりわけ冒頭部の「先士卒指麾」などは、これに対応する内容が原詩に含まれていないことか、前文の「Being out on an expedition to reconnoitre the enemy 敵を偵察するために遠征していた時」を踏まえていとも考えられる。

Try Again そのものとの比較でいえば、「勢力既凋衰。縦我尽人力。奈敵得天時。偶有墜前者。小蟲抱細糸。認知是蜘蛛。」の「He flung himself down in low despair. As grieved as man could be : And after a while as he pondered there, "I'll give it all up," said he. / Now just at the moment a spider dropped, With its silken cobweb clue, And the king in the midst of his thinking stopped To see what the spider would do. / 'Twas a long way up to the ceiling dome, And it hung by a rope so fine,」の王の意気消沈した姿、蜘蛛が「dropped」＝「偶有墜前者」、「a rope so fine」＝「抱細糸」の対応は明らかであるし、それに続く「蜘蛛の描写や」、「Steadily, steadily, inch by inch. Higher and higher he got, And a bold little run at the very last pinch, Put him into his native spot.」＝「一寸又一寸。漸上近罌罍。料其力可達。一躍得其棲。」、「"Bravo, bravo!" the king cried out, "All honour to those who try. The spider up there defied despair, He conquered, and why shouldn't I?"」王感嘆而叫。曰大奇大奇。偉勲与栄明。堅

忍者得之。」との照応などを確認する限りで、「詩意」の「訳」であるという断り書きを越えて、直訳ではないかと思われるほどである。さらには、原詩の最後の二連と同じく、読者に向けた教訓的呼びかけで締めくくられていることから、この *Try Again* を原詩と見てよいと考えられる。ただし、問題はその先にまだある。『敬宇詩集』にわずか三編しか存在していない翻訳詩の一つが、この「普魯斯詩」であるということをもどくように考えるべきなのか。

たしかに、詩の執筆時と『敬宇詩集』を自撰した時とが異なるのだから、実際には三編以外にも翻訳詩が存在していたのかもしれない。だから、この三編に当時の心境が余すところなく語り尽くされている、というような即断はできない。取捨選択した際の、いかなれば後半生を振り返った時の、感慨こそを読み取るべきであるのかもしれない。

そうした種々の問題を一時に解決するだけの判断材料を、筆者は目下のところ持ち合わせていない。それでもなお、この「普魯斯詩」には、敬宇のある一面が明瞭に投影されているのではないかと思われる。

野山氏の前掲論文が指摘するように、この時期の敬宇の詩には、「落魄感」や「敗残の趣」を伝えるものが少なくない。しかし、「普魯斯詩」に刻まれているのは、それとは反対に、絶望を振り払い再起するロバート一世に託して、幕府の倒壊により失意の中で帰国、静岡に移住し、妻の実家に仮寓せざるを得ないほど逼迫した状況においてなお、自己を奮い立たせようとする敬宇自身の姿である。そして、伝記的事実に照らせば、静

岡の地で明治期最大のベストセラーの一つ『西国立志編』を出版、一八七二（明治五）年には大蔵大輔井上馨から勝安芳（海舟）と大久保一翁を通じて招かれ大蔵省翻訳御用を務めることになる。さらに同人社を設立、明六社に参加、東京女子師範学校摂理、東京大学教授等を歴任など、名実ともに新時代の教育家としての地位を確立するのである。

それでは、敬字の漢詩において、奥野の和歌とは違い、信仰が直接詠まれることがついになかったのはなぜなのか。

敬字は、東京へ移った後、一八七四（明治七）年一二月、カナダ・メソジスト教会宣教師ジョージ・カクランより洗礼を受ける。イギリスへ留学して以来、西洋文明の精神的支柱と信じたはずの信仰へ自らも身を投じ、晩年には教会から離れ自由神学的立場に立つたとはいえ、キリスト教に関する著作も残した敬字が、にもかかわらず、詩というかたちでそれを詠わなかったのは、いったいなぜか。

揖斐氏は、前掲論文において、昌平黌で学び、さらには佐藤一斎に師事して陽明学の要素もある敬字ではあったが、その本質はやはり朱子学であって、その詩文観もまた朱子学的であったとされる。「敬字の詩が叙情性に乏しく、叙事性に勝っているのは」、例えば「新選三体詩序」（『敬字文集』巻一四）で敬字が「漢詩作者が手本とすべきは、『詩経』と杜甫韓愈蘇軾・陸游」と述べていて、それは彼らがいずれも「危機的な状況にあつて「言志」の詩を詠んだ、いわゆる社会派の詩人であつた」からである、と指摘している。

この朱子学的な詩文観の江戸期における変遷を、野口武彦氏

は以下のように概括する。朱子の詩文観においては、「天理」または「道理」の觀念が人間存在を超越的に原理づけているがゆえに、文学というものの心的動機というべき自己存在への關心が顕現することはないが、しかし、寛政朱子学の内部における「道」「理」の超越的性格の動揺に則して「文学的關心」が自立してくる、と（注18）。言い換えれば、朱子学的な詩文観にあつても、自己存在を注視したり表白したりすることは、不可能ではないのである。

先に、「普魯斯詩」から読み取れるのは、再起して公の世界へ帰還しようとする敬字の姿であり、それと対蹠的に、敗残の「心境を率直に伝えるもの」（野山）が同時期の詩に見られると指摘した。後者は、「有感 帰自英国寓婦翁家」と題された詩中の「処世如旅寓／百物非真有……天名応順受／吾生似浮萍／那能謀長久」という表現が端的に示すように、〈隠逸〉の思想に直結すると思われる。実は、再起する前のロバート一世の姿が敗残の敬字に重なるという点においては、対蹠的であると同時に、通底するものでもあるのだ。

神楽岡昌俊氏によれば、「隠者」という語は古く「論語」に見え、「隠逸」という語が初めて見えるのは「後漢書」「何武伝」であるという。「隠逸」は、その社会的動機として「世俗の虚偽な生活に対する反感」、「官僚生活における裏面の汚濁」からの逃走があり、その典型の一つとして、陶淵明に見られるように、「いわゆる出家ではなく、帰田園といわれることく、田園に、家に帰った」、すなわち帰去したと概括される（注19）。こうした古代からの〈隠逸〉思想は、かたちを変えつつ、江戸詩壇にも確か

に引き継がれている。

揖斐高氏の「柏木如亭論序説」(注29)は、高岡秀成において「解得陶潜帰去嘆」(解し得たり陶潜の帰去の嘆き、『酔月楼余稿』「自遣」という表現があり、ここに「志を實踐する場を得ないための、いわば強いられた沈黙」、「経世の学への消滅を意味しているわけではない」沈黙、「官途」↓「帰去(＝隠)的な発想」が読み取れるとしている。揖斐氏の論文の趣旨は、むしろこれとは明らかに異なる柏木如亭の〈黙〉なのであるが、ここでは陶淵明「帰去来辞」に代表される〈隠逸〉思想の連続性だけを確認できればいい。そして、それは近代にもつながっている。齋藤希史氏は、公的世界を支える精神と「土人的エトス」、「俗塵を忌避し、清談を好」む「文人的エトス」とに整理し、明治の知識人もまた、文人的エトスに支えられて、「公から離れた私の世界を語る」漢詩を志向した、と指摘されている(注30)。本稿に即してみれば、「普魯斯詩」は前者に、「有感」に見られる心境は後者に、該当する。

であるとすれば、別の翻訳詩、②「僻村牧師歌 訳英人ゴードルスミス詩意」に描かれているのが、あくまでも「僻村」＝「The Deserted Villages」において、貧困の中にありながら「臭穢の丐子」＝「Beggars」ですら「賓客」＝「his guest」とするような牧師であること、そして、なおそれが敬宇自身の信仰の告白へとつながっていかない理由が見て取れる。つまり、表現される「信仰」のかたちが、結局、隠者の姿に、〈隠逸〉の思想に収まるということである。

奥野と敬宇の差異とは、個人史的には信仰の差ということに

なるのだろう。つまりは、眼前の不条理を信じるか否かであり、社会的把握でいえば、〈超越／内在〉(ニコラス・ルーマン『宗教社会学』のアポリアであって、それは宗教の核心に触れる問題である。だが、一方でそれは、詩心の発露の違いであり、和歌と漢詩の系譜に由来する詩形の違いそのものである)。

注

(1) 「和歌とロゴスーへボン訳聖書における歌人」、「国語と国文学」、東京大学国語国文学会、令和六年九月、一一九八号、第一〇〇巻第九号。

(2) 言葉には不思議な力が宿るとする言霊思想が、日本には、古来より現代まで存在する、という常識的で辞書的な説明に対しては、すでにいくつかの否定的な研究がなされている。仮にこれが自然な発想だとしたら、たとえば一六世紀のキリシタン文書の中にもそれが見出されて不思議はない。しかし、そのような用例は存在しない。そもそも「言霊」という用語は、万葉集中にわずかに三例しかない言葉であり、宣教の対象であった一六世紀の民衆が使い得ない古語であって、それをわざわざ難解な原語にあてる必要性はない。佐々木隆『言霊とは何か』は、上代の「言霊」は神だけに属する言葉の威力に限定されており、今日の辞書的な説明は、「近世の国粹主義者たちが理念的に作り上げた言語観の影響を受けたもの」とする(二〇一三年八月、中公新書、二二二頁)。

(3) 漢訳聖書における「ロゴス」の翻訳については(注1)を参照。

日本で宣教師たちが用いた漢訳聖書は、いくつかの改訂版はあるが、基本的には二種類である。一つは、一九世紀前半に中国で布教活動を行ったロバート・モリソン訳の『神天聖書』(一八二三年、『新遺詔書』(一八一三)と『旧遺詔書』(一八二二)の合冊)、もう一つは、ブリッジマン・カールバートソン訳の『新旧約全書』(一八六四年、『新約全書』(一八五九)と『旧約全書』(一八六二、六三・六四年説もある)の合冊)である(塩山正純『初期中国語訳聖書の系譜に関する研究』、一五三・四三六頁)。また、「Chinese Repository」の諸論文についても(注1)を参照。

(4) 一九九六年七月、大空社。

(5) 岡本聡『香川景樹』、二〇一一年五月、笠間書院、五九頁。

(6) 高橋昌郎『中村敬宇』、一九九六年九月、吉川弘文館、四五頁。

(7) 高橋昌郎『中村敬宇』、二一八頁。

(8) 高橋昌郎『中村敬宇』、八七頁。

(9) 韋廉臣著、熊野与訓点、奥野昌綱校訂、一八七八年一月、十字屋。熊野与は横浜バンドの一員熊野雄七の父である。訓点者として複数のキリスト教書に名がある。ブラウンの元で学んでいた雄七との関係を通して、知己を得たのではないかと推測される。『略伝』には『格物探源』の訓点について、次のようにある。

或日曜日朝、例の如くペテロの悔改に就いて、熱心に心を込めて説教した。会堂の前には、故熊野亭堂(名与)

翁が、是亦熱心に耳を傾けて之を謹聴して居つた。翁は故雄七氏の父であつて、漢学の造詣が深かつた。……先生が格物探源に訓点を施すときには、翁も亦其相談に預り、共に之を訓読して、互に其文章の妙味を語り合ひ、之を出版するときには、翁自ら其名を署して、之が校閲の責に任じた。故に基督教のことは一通り之を領会して居つたけれど、未だ其信仰を表白するまでには至らなかつた。(九九頁)

(10) 小泉仰『中村敬宇とキリスト教』、比較思想史研究会編『明治思想家の宗教観』所収、一九七五年五月、大蔵出版。

(11) 敬宇の師で陽明学をも修めていた佐藤一斎が昌平黌の儒官となつたのは一八四一(天保一二)年で、奥野とは入れ替わりになる。この点については、前田愛『中村敬宇』(『幕末維新期の文学』、一九七二年一〇月、法政大学出版)が、敬宇の教養が「朱子学的と規定するには微妙すぎる」とし、揖斐高氏(注12)は「陽明学的な要素も無いわけではないようだが、基本的には朱子学だった」とする。本稿は後者に従う。

(12) 『新日本古典文学大系明治編第二巻 漢詩文集』、二〇〇四年三月、岩波書店、のち『近世文学の境界』所収、二〇〇九年二月、岩波書店。

(13) 野山嘉正『日本近代文学の詩と散文 明治の視角から』所収、二〇一二年八月、明治書院。

(14) 一九二六(大正一五)年二月、敬宇詩集刊行発行所。

(15) 揖斐氏の注釈は、③について、「敬宇がこの詩を翻訳するに際して、どのような詩集あるいは詞華集に拠つたかは未

詳。」とする。②の出典については、中村正直文庫（成蹊大学図書館）所蔵 *Select English Poetry* に収められている *The Country Clergyman* もしくは *Lives of British Poets* に引用されている *The Village Preacher* のいずれかであるが、「詩の本文に基本的な異同はない」とする。実際のところ、これは *Oliver Goldsmith* の長詩 *The Deserted Village*, 1770 の一部である。題名の違いは、各々のアンソロジーの编者によるものと思われる。

(16) 「東北学院大学論集——人間・言語・情報」第二二〇号・第二二四号、一九九八年七月・一九九九年一月、東北学院大学学術研究会。

(17) 引用は、Edward Hughes, *Select English Poetry, with Prose Introduction, Notes, and Questions: For the Use of Schools and Private Reading*, 1852; Longman, Brown, Green and Longmans による。また、同じ编者による *Select Specimens of English Poetry*, 1856 も参照できたが、前者に増補されたもので、本文は同一であった。この二書には、敬字の引用文献が未詳となっている③の原詩ロングフェローの *The Village Blacksmith* も収録されている。ただし、二書とも成蹊大学図書館中村正直文庫に収蔵されていない。敬字蔵書のすべてが同文庫に収められているわけではなく、調査は継続中であるが、これに類する英詩アンソロジーが失われた可能性は高いと思われる。他に *Poems by Eliza Cook, A New Edition, in One Volume*, 1861, London にも収録されているが、前文はない。

(18) 野口武彦『江戸思想史の地形』一九九三年九月、ペリカ出版社。

(19) 『中国における隠逸思想の研究』一九九三年二月、ペリカ出版社、序説、第六章。

(20) 『江戸詩歌論』所収、一九九八年二月、汲古書院。

(21) 『漢文脈と近代日本』二〇〇七年二月、日本放送出版会、第三章。

※注(9)について

前稿「和歌とロゴス」では、『格物探源』の訓点者熊野与が熊野雄七の父であって、雄七と奥野の関係から両者には面識があるものと推察しつつ、訓点者が熊野とされていること自体については、「詳細は不明」としていた。しかし、『略伝』の記述を見落としていたことに改めて気づいたため、本稿で当該箇所を引用するとともに、前稿の注(32)を修正することとする。